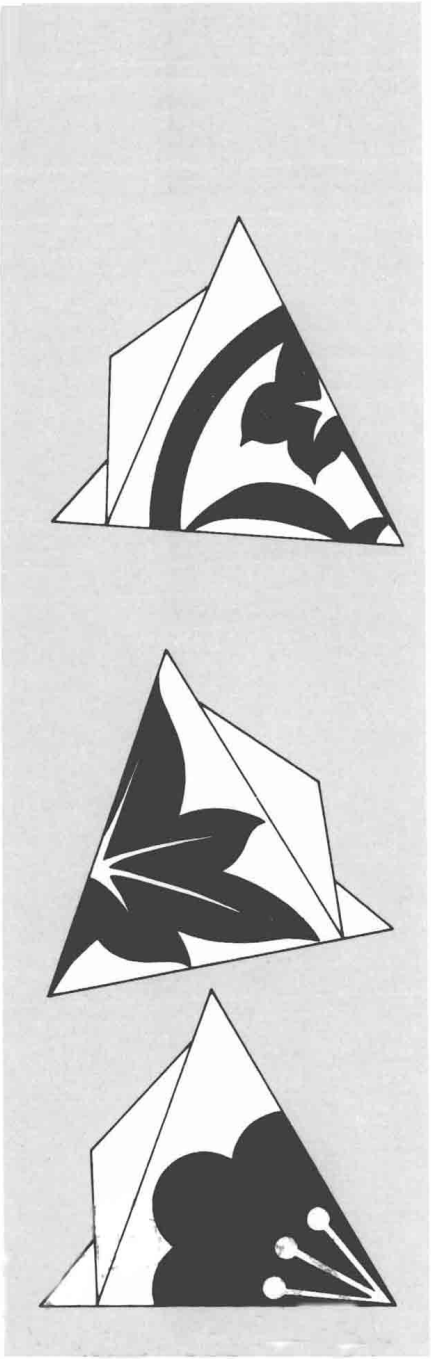
花小説・戯曲選

第九巻

岩波書店



鏡花小説・戯曲選 第九巻　第七回配本（全十二巻）

一九八一年一二月一二日　第一刷発行

定価三〇〇〇円

著者　泉鏡太郎

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二―五―五
株式会社 岩波書店
電話 〇三―二六五―四一一一
振替 東京六―二六二四〇

印刷・三陽社　製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 泉名月 1981　Printed in Japan

目　次

湯島詣……一
葛飾砂子……一四三
白　鷺……一八九
賣色鴨南蠻……三九五
解　説……村松定孝……四二九

湯

島

詣

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

紅茶會　三兩二分　通ふ神　紀の國屋

段階子　手鞠の友　湯歸り　描ける幻

朝參詣　言語道斷　下かた　狂犬源兵衛

半札の圓輔　犬張子　胸騷　鶯

白木の箱　灰神樂　星

紅茶會

一

「紅茶の御馳走だ、君、寄宿舍の中だから何にもない、砂糖は各々適宜に入れることにしよう。さあ、神月。」

三人の紅茶を一個々々硝子杯に煎じ出した時、柳澤時一郎は其のすつきりと脊の高い、緊つた制服の姿を籐の椅子の大きなのに、無造作に落していつた。

渠は腕袋の美しい片肱を椅子の緣に掛けて、悠然とぶら下げながら、

「篠塚、其の砂糖をお客樣に出して上げろ。」

「おい、」と心安げに答へたのは和尙天窓で、背廣を着た柔和な仁體、篠塚某といふ哲學家。一脚の卓子を圍んで、柳澤と差向ひに同じ椅子に掛けて居たが、體を捻つて、背後へ手を伸すと雜書を納れた本箱の上から、一瓶の角砂糖を取つて、之を二人の間に居る一人の美少年の前に置い

た。

「取つて頂くよ。」と優しく會釋する、之が神月と呼ばれた客で、名を梓といふ同窓の文學士、いづれも歴々の人物である。

梓は柳澤が煎じてくれた紅茶の、薄紅色の透取る硝子杯の小さいのを取つて前に引いたが、いま一人哲學者と肩を並べて、手織の紬入に小倉の袴、紬の羽織を脱いだのを、紐長く椅子の背後に、裏を翻して引懸けて、片手を袴に入れて、肅然として讀書する薄髯のあるのを見て、

「何を讀んでるんです、」と少しく腰を浮かして、差覗いて聞いた。

「僕、」と應じはしたけれども、急に顔を上げたので誰に返事をするのであるか、自分にも分らないで迂路々々するのを柳澤は氣輕に引取つて、

「若狹が讀んでるのは歴史だよ、國史專修の先生だもの、須臾の間も研究を怠らない。」

「御勉强です、」といつて神月が點首くと、和尙は、にや〳〵と笑ひながら、其の讀んでる書を横目で見た。柳澤は吹出して、

「眞面目な挨拶をする奴があるものか、歴史は歴史だが大變なもんです。無名氏著、岩見武勇傳だから可いぢやあないか。」

「酷く研究をして居ります、」と哲學者は仰いで飲む。之が聞えたものらしい。若狹は讀みながら

莞爾とした。

「又何ぞの材料にならないとも限らないだらう。」と梓は其の硝子杯を手にした。

柳澤は斜に卓子に凭れて、小刀の柄で紅茶に和した角砂糖を突きながら、

「そりやある、其の材料のあることは丁度何だ、篠塚が小まさの淨瑠璃の中から哲理を發見するやうなもんだ。」

「馬鹿をいへ。」

梓は傍より、

「然し君も鳥屋の女の言は、時に詩調を帶びると、然ういつた事があるよ。」

底意なき人達は三人一堂に笑つた。

「賑がだね、柳澤。」と窓の下の園生から聲を懸けたものがある。

二

一番窓に近い柳澤は、亂暴に胸を反して振向いたが、硝子越に下を覗いて見て、

「龍田か。」

「誰か來て居るかい。」

「根岸の新華族だ、入れ。」と云つて座に直る。

同時に、ひよいと窓の縁に手が懸つた、飛附いて、其以前、器械體操で馴らしたか、身の輕さ、肩を搖り上げて室の中に、先づ其の瀟洒なる顏を出したのは、龍田、名を若吉といふのである。

梓を見て笑を含み、

「堪忍してやれ、神月はもう子爵ぢやあない。」といひながら腕組をして外壁に附着いたまゝで居る。柳澤は椅子をずらして、

「まあ入れ、丁度可い。今其事に就いて、神月問題といふのをはじめた處だ。一寸其休憩時間よ。神月が酷く辯論に窮して、き樣の來るのを待つて居たんだぜ、龍田が居たらばッて然ういつてな。」

聞きも果てず、滿面に活氣を帶び來つた龍田は、飜然と躍込み、二人の間へ衝と立つて、卓子に手を支いたが、解け懸る毛絲の襟卷の端を背後へ撥ねて、

「可し、又例の筆法で苦しめたか、神月君、」

親しげに、

「よく、僕を待つててくれました、もう大丈夫だ、心配を爲たまふな。僕何のために學生となつ

て、法律を研究してると思ふ、皆親友神月の辯護をするためだね、何うです。」

「何うぞ宜しく、」といつて梓は戯れに頭を下げた。

龍田は其の薩摩飛白の羽織の胸紐をぐッと〆め、

「さあ、來い。」

「又やんちやんが始まるな、」と哲學者は兩手で頤を支へて、柔和な顏を仰向けながら、若吉を瞶めて剃立の髭の痕を撫で廻す。

「大概分つてるさ、問題といふのは神月が子爵家を去つて、彼の夫人に別れて、谷中の寺に籠城して、そして情婦の處へ通ふのを攻擊するんだらう。」

「勿論、」と簡單、ぐわちやりと雜具の中へ小刀を投出して、柳澤は大跨に開き直り、

「最初、神月が其の夫人との中に感情を害したのは、不幸にも結婚の第一日、卽ち式を擧げた日だ。」

「然やう、」と突込んで應ずる龍田の聲は明快である。

「き樣も知つてるな、僕も聞いた。而して成程と思つたが、考へて見ると蓋し神月の方が非なんぢやあないか。」

「何、那樣ことがあるものか、新婚旅行に出掛けようとして、上野から汽車に乘込むと、未だ赤

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

羽の聲も掛らぬうち、山下の森の中で、光りものがした。神月は――おや、人魂が飛ぶ、――と何心なくいつたんだ。谷中は近し、こりや感情だね。然うすると、彼の嚊々め。」

「龍田窘め、旦那様の前ぢや、」と哲學者が戯れる。

顧みて、

「失敬。」

「結構、」といつたのは、其の所謂旦那様梓であつた。龍田は勢よく、

「何うだ、小生意氣ではないか、――いゝえ、星が流れたんです、隕石でございます、――と云つた、其ればかりならば未だしも恕すね。」

三

「神月が人魂だといつたのを聞いた時、那奴愛嬌のない、鼻の隆い、目の強い、源氏物語の精靈のやうな、玉司子爵夫人龍子、語を換へて云へば神月の嚊々だ。君、其奴がね其の權式高な、寂しい顏に冷かな笑を帶びてさ、文學士を輕蔑したもんだぜ、神月なるもの癪に障らざるを得んぢやあないか。」

「可し、婿さんは癪に障つたらう。癪に障つたらうが、又夫人其人の身になつて、其時には限ら

ぬが、凡て神月の性質と、行を見た時の夫人の失望を察せんけりや不可。尤も餘り物質的の名譽を重んずる夫人の性質も極端だが、其だけに又儕輩に群を抜いて、上流の貴婦人に、師の如く、姉の如く、敬ひ尊ばれて居る名譽を思へ、七歳の年紀から佛蘭西へ行つて先方の學校で育つたんだ。」

「待て、待て、少し待て。」と龍田は掌で卓子を押へ、語を遮り、

「まあ待て、先方が七歳の時から佛蘭西で育つたんなら、手前どものは六歳の年紀から仲之町で育つたんです、尤も唯今は數寄屋町に居りますがね。」

「龍田、」と留めた、梓は恥づる色があつた。

「可いよ、君、可いから言はして置け、何うせ皆御存じなんだ。何うです、彼が佛蘭西で、學び、日本で得た、凡ての學識と、其の子爵たる財産と、家屋と、庭園と、十幾人の奴隷とだ。其の言一句と雖も忽にせず、一擧手一投足と雖も謹んで、二十七歳の今日まで、旭の昇るが如くに博し得た名譽とを、悉皆神月に捧げて、其の妻となつたのを、恩だといふんなら、此方にだつて其の一切に價するものがあるんだよ。」

哲學者は言を挾み、

「見給へ、又龍田が例の笛と鼓を持出すからな、はゝゝゝはゝ。」

「何を失敬な、」と哲學者を一寸睨んで、
「然うさ、持出すが悪いか。先方ぢやあ巴里で、麵麭を食つてバイブルを讀んで居た時に、此方ぢやあ、雪の朝、顫へてるのを戸外へ突出されて、横笛の稽古をさせられたんだ。吹込む呼吸が強くなるためだといつて抱主が、君、朝御飯も食べさせない、耐るもんか、寒い處を、笛を習つてる中に呼吸が續かぬから氣絶するのが、毎朝のやうだ、水を吹かけて生返らして、それから握飯の針のやうなのを二ツづつ貰つて食べる、歸ると三味線のお溫習をして、其のまゝ下方の稽古に遣られる。直ぐに踊の師匠に打ちのめされるんだ。生疵の絶間もない位、夜はといふと座敷を廻り歩いちやあ、年上の奴に突飛ばされて、仰向けに倒れると見つともないといつて頬板を打たれたもんだ、何の爲だ、同じ我々同胞の中へ生れて來て、一方は髯を生して馬車に乘つた奴に尊敬される、一方は客とさへいやあ馬の骨にまで、其の笛を以て、其の踊を以て、勤めるんです、此間に處して板挟となつた、神月たるもの、宜しく彼を棄ててこれを救ふべしぢやないか。何うだね、殊に親も兄弟も叔父叔母もない。唯手足と、顔と、綾羅錦繡と、三味線と冷酒と踊とのみあつて存する、あはれな孤兒を何うするんです、ねえ君、其處は男子の意地だ。」と若い人は意氣頗る昂つた。
柳澤は冷然として、

「あらず、然云ふ意地は、鳶の者も持つてるぢやあないか。」

四

此折から譬へば荒瀧を寸々に切つて落すやうな、がッ〳〵といふ響がした。此音は校舍の奥の方より遙に轟き來つて、床下を決して戸外へ拔けたのである。

先刻から故と笑顏を裝ひながら、何か澄まないらしい色が見えて、殆ど茫然したかの如く、柳澤と龍田の論ずる處を聽いて居た文學士は、太くこれを感じた樣子で、

「何だね、今の音は、」と安からぬ狀して尋ねた。

柳澤、其のあらぬ方を瞶めて居て落着かない梓の面を瞻つて、

「忘れたか、神月。」

「何を。」

「今の音を。室を煖める蒸氣ぢやあないか。」

言ふ時、煉瓦造の高い寄宿舍の二階から一文字に懸けてある鐵の樋が鳴つて、深い溝を一團の湯氣が白々と渦き上つた。硝子窓は朦朧として、夕暮の寒さが身に染みるほど室の煖まるのが感じらるゝ。

柳澤は片手を握つて、長く之を神月に差向けて卓子の上に置き、
「それだから既う寄宿舎に居た頃の事を君は忘れて了つたのだ。既に幾度も君が學資に窮して、休學の已むを得ざらむとする毎に、常に佛文の手紙が添て、行屆いた仕送があつたではないか。神月、君が俊才有爲の士である事は皆が認めて居た、けれども、いざとなつて金貨を積んで其の業を助けたものは、天下に今の夫人を措いて他にやなからう。
さうすりや恩人で又唯一の知己といはなければならない。夫人の名譽のため、幸福のため、子爵のためといふよりも、唯其の知己であるといふばかりに對しても、君の行は些と間違つて居るぢやあないか。」
梓は聞いて物をもいはず差俯向いたにも係らないで、龍田は凛として姿を調へ、
「柳澤、那樣ことをいつて僕の居ない時に梓君を苛めるのか、止せ。可いよ、待て、まあ、僕のいふことを、今君のいふ如くんばだ。嚊々殿は佛文の手紙と、若干金の學資とを以て神月を買つたものだと言はなけりやなりません、其奴あ御免を蒙り度いな、仕送をしたつていくらがもんです。金子なら千か二千ぢやあないか。利をつけて返すくらゐ然ほど困難なことでもなし、又其位な價で婿に買占められるやうな、僕の梓君ぢやあない。其を兎も角も言に應じて玉司家を嗣いだのは、卽ち君のいふ、其の知遇に感じたからだ。

然るに、のつけから人魂と流星の事で早くも神月の感情を害ねたのは何う云ふ譯だい。

總て女學校の教科書が貴婦人に化けたやうな譯で、まづ情話を聞かされると頭痛がして來るといやあ、生理上然云ふことのあらう筈はない、と云つた調子だから耐つた譯のもんぢやあない。

鰹は中落が旨くッて、比良目は緣側に限るといやあ、何ですか、其處に一番滋養分がありますか、と仰有るだらう。衞生盡めだから耐らない。やれ教育だ、それ睡眠時間だ、もう一分で午砲だ、お晝飯だ。お飯だ。亭主が流行感冒一つ引いても、最先に傳染性なりや否やを醫師に質すやうな婦を、貴婦人だつて、學者だつて、美人だつて、年增だつて、女房にして居らるゝもんか。」

五

「考へて見給へな、名譽だの、品性だの、上流の婦人の龜鑑だのと、體の可い名は附けるものの、何がなし見得坊なんぢやあないか。

御覽なさい、だから神月と結婚をした當座に、はじめからの關係を知つてる新聞が報道をすると、其の記事の中に、何か夫人が豫て神月に戀をして居たといふやうな意味が書いてあつたといつて、嘆々め恐しく憤つて、名譽を蹂躙された、世の中へ顏出しも出來ないてッたやうなことを云つて、恰も神月君が社をして書かしめたやうに當り散らしたといふんだ。夫に愛しとると云ふ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com